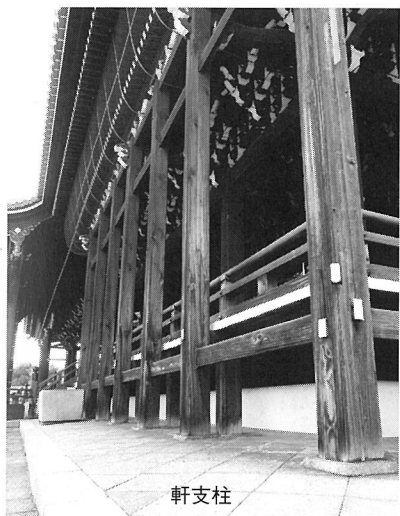


御影堂 ②

編集室



軒支柱

■御影堂の内陣外陣の彫刻と障壁画

御影堂の大きさは、「南北二十丈八尺八寸、東西十五丈四尺七寸、高さは上棟まで十四間半」といわれ、正面の幅六十二メートル、奥行き四十八メートル、高さ二十九メートルの単層の建築としては世界最大級の木造建築である。この御影堂の特徴として、内陣部分を土壁で包み込む大壁（外壁）を持つ構造であることと、深い軒を支えるために落縁の高欄の外にある軒支柱三十三本が並び立っていることがあげられる。この深い軒は、建物を威風堂々と見せるためと幅八メートルもある縁（広縁・落縁）を風雨から守るためのものである。また御影堂の柱は丸柱と角柱からなり、「角柱百二十六本、丸柱四十一本、金丸柱六十本、



内外陣境欄間

横笛を吹く飛天の臺股

とあり、六角の廟堂を建てて影像を安置したことによって、大谷影堂といわれるようになる。はじめは単に「影堂」と呼ばれていたが、途中から「御影いたう」とか「御影堂」というように「御」の敬語をつけて呼ぶようになる。しかしこれを現在ののように「ごえいどう」と読んでいたか、また「みえいどう」や「おんえいどう」と読んでいたかは右仮名をふっていないので明確ではない。東西本願寺は「ごえいどう」と呼んでいるが、他の宗派などは「みえいどう」というのが普通であって、「ごえいどう」というのは本願寺、浄土真宗の特色と考えられる。

その御影堂は、親鸞聖人の影像を安置する堂舎であるが、本願寺第八代蓮如上人の息である実悟が著した『本願寺作法之次第』には「内陣開山聖人の御座所なれば可有其心得也」とあって、親鸞聖人の御座所といわれている。このところは第十三代良如上人にも受け継がれ、御影堂再建のご消息に「誠に開山聖人の御座所をばいかでか粗略の儀あるべき、聖人の御出世なく、此御勸化にあひたてまつらずは、末代不善の在家止住のともがらは、何として生死

総柱数二百二十七本」と『本願寺通記』にはあるが、今回の調査で確認された番付百八十七本に、向拝柱四本、内陣台高柱二本を加えて合計百九十三本の柱で御影堂が支えられていることがわかった。

御影堂内部は、内陣と外陣に大きく分けられ、内陣は間口五間で、中央にある須弥壇は出仏壇形式になっており、内陣両側には床面を下げた余間があり、その余間の両側に脇の間（三の間）、その両側に飛檐の間が床面をそれぞれ幾分か下げてある。外陣は畳を横長に敷いた四百六十二畳敷き

で、内陣と外陣の間には百花の王である牡丹を浮彫にした欄間彫刻がある。これらは御影堂再建当初の寛永年間のもので総数は十五枚あって、一枚の大きさは二メートル以上あり、一枚に五から七つの満開や半開つぼみなどの花を配置している。また天井近くの組物の間に墓股があり、飛天や楽器、動物などの彫刻がされていて、堂内だけでなく向拝や広縁などにも見られ、総数で七十四体ある。

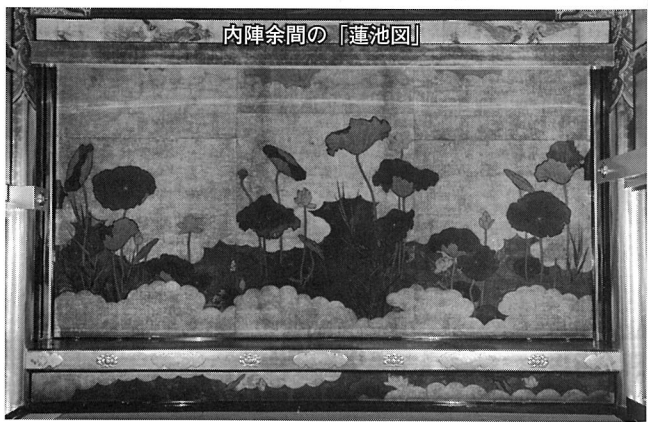
親鸞聖人の御影像を安置している厨子の背面の部分と、内陣余間の壁に描かれた「蓮池図」は、御影堂再建当初のもので、

をはなれ、順次の往生をとぐべき忝きよとおもはば……」とも、「祖師の御住所を崇敬之故、御影堂造立の刻も始終無油断……」といわれ、御影堂は親鸞聖人がましますところと考えられていた。

文永九年に建てられた廟堂に安置した影像は、はじめは絵像であったとも、木像であったともいわれているが、木像は『考信録』に「灰骨を抹して真像を修飾して安置す、故に骨肉の御影と称」といわれ、蓮如上人は「御文章」（本願寺真本）に「生身の御影」といわれ、文明十一年の『御文章』（東本願寺真本）には「年来大津に此十余年之間御座ありし根本之御影像をうつし奉りぬ」と「根本の御影像」と尊崇している。『本願寺跡書』には「根本の生身の御影様」といわれているが、この根本生身の御影、骨肉の御影を内陣中央の須弥壇の厨子のなかに安置しているのが御影堂である。その両脇には親鸞聖人の教えを代々に渡って伝えられた本願寺の歴代の宗主の絵像を安置し、右余間（北側）には「帰命尽十方無碍光如来」の十字名号を、左余間（南側）には「南無不可思議光如来」の九字名号を安置している。

雁皮紙に金箔を押しした上から描かれ、高さ五・六メートル、幅八・三メートルと障壁画の中では最も大きく、本願寺絵所の絵師であった徳力善宗、善雪父子が描いたものである。

また内陣と外陣の中央には、三間の巻障子があり、両端には巨大な襖絵が南北にそれぞれ六面ある。北側六面には「雪松図」、南側六面には「雪梅竹図」が描かれ、松と梅がそれぞれ相對するように配置されていて緊密感を保っている。一面の大きさは二百四十三センチ×百センチと大きい。この作者は、寛永年間の再建当初に描いたとされる徳力善宗、善雪父子であろうと考えられていたが、文化年間の大修復に際し新調したもので、下絵があることなどから本願寺書院の「浪の間」の波濤図を描いた円山派の吉村孝敬であることがわかった。



内陣余間の「蓮池図」